

「わたくしたちの音楽」150号に寄せて

## 忘れられぬ出会い

海浜幕張の駅で電車を降りると、朝の冷気が身を包んだ。平成元年11月23日、第一回生涯学習フェスティバルの開会式当日である。前日の最終準備を終えて千葉市内のホテルに泊まり、夜の明けるのを待ち構える気持で一晩を過ごした。早朝に部屋の窓から見渡す空は、端に雲がかかっているものの、晴れ。勇躍、会場である幕張メッセと向かうところだった。

駅からメッセまでの道はまだ人影もまばらだが、ほつほつと行くのは大きな楽譜袋を抱えた人たち、そう、開会式のメインイベント「グランドピアノ 111台による演奏会」に参加する方々だとすぐにわかった。11時の演奏開始の3時間以上前からこうやって集まって下さるのだと思い、フェスティバル全体の責任者として感謝の念を新たにす。前日総リハーサルの際にうかがったら関東だけでなく全国から泊まり込みでみえた方もいらして、われわれの企画にそこまで熱心に取り組んでいただけたのかと、勇気づけられた。

子供さんは皆お母さんに付き添われている中、ひとりの小柄な男の子が目についた。背中に楽譜袋を背負い、ひとりだけで脇目もふらずに歩いていく。身体が前にかしがんばかりの勢いだ。その姿は、ひたむきな決意に満ちている。わたしは、こういうのに弱い。胸が熱くなってしまう。どんな子かな、と追いつこうとするのだが、彼はいっさんに進んでいくから、なかなか差が縮まらない。やっと追いついて、声をかけた。

「きみも今日弾いてくれるの？」

「はい」

想像していた通り利発そうな顔をした男の子は、突然話しかけた見知らぬおじさんに、きちんと答えてくれた。

一緒に歩きながら聞いたところでは、名古屋の方から来たとのことで、ひとりで新幹線に乗り、昨夜はひとりでホテルに泊まったという。ひとつ聞かたびに感心する

文部省

寺脇 研



ばかりだった。こんな子には、大人と同じように敬意をもって接しなければならない。大人だって、これほど敬意を払う気になれない輩はいくらもいる。

「おじさんはね、今日の責任者なんだよ」

「あ、昨日リハーサルのときにお話した人ですね。文部省の…テラワキさん」

総リハーサルの後にちょっと壇上で感謝の言葉を言っただけなのに、よくまあ覚えているもんだ。とうとう名刺を差し出して挨拶してしまった。

「帰ったら御両親にこういう人がありがとうと言ったと、伝えて下さい」

イベントホールまで来て演奏者の集合場所がわかった、男の子は小走りに駆けて行った。

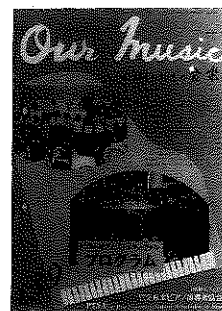
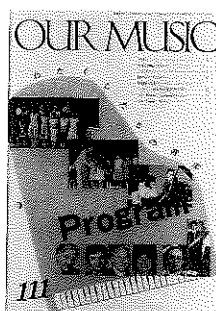
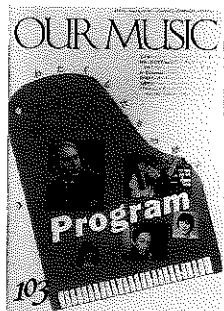
「がんばって弾いてね」

と別れしなに言いはしたが、きっといい演奏をしてくれるに違いない、いや彼だけでなく全体がみごとな演奏となるに違いない、と確信していた。

結果は、御存知の通りである。開会式は大きな感動の渦を巻き起こしたし、フェスティバル期間中を通し予定の倍を超す25万人近い人々が集まってくれ、さしたる事故もなく閉幕することができた。

初日の朝からこんな気分のいい出会いがあった生涯学習フェスティバルである。失敗に終わるわけがない。人間は出会いを繰り返すために生きているようなものだろう。いい出会いは、生きる喜びの最たるものだろう。つまり生涯学習とは、人とのいい出会い、事柄とのいい出会いを作るための努力であるのかもしれない。その意味で、111台のピアノの鍵盤を叩いた4百余名の皆さん

PTNA  
ピアノフェスティバル  
プログラムとなった会報  
●103号 昭和58年8月  
●111号 昭和59年8月  
●139号 昭和63年8月  
●146号 平成元年8月



と、当日会場を埋めた6千人以上の観客は、すばらしい出会いを体験したと言えるのではないか。

この出会いの場の中核となったピティナの皆様、心から御礼申し上げます。当方の不手際で事前の連絡との食い違いがあったり、ホール客席への入場の際御迷惑をか

けたりしましたが、あの生涯忘れられない4百の心が溶け合った演奏に免じてお許し下さい。

また、あんな出会いの場が作れるといいですね。(文部省生涯学習局生涯学習振興課課長補佐、第1回生涯学習フェスティバル事務局長)

## 歴史を創っていくピティナ

ピティナは歴史を創っています。音楽教育の未来にむかって、一步一步時代の階段を登っています。

私は、ピティナ「わたくしたちの音楽」150号発刊記念にお祝いを述べながら、創造の世界で、何が最も高く評価されるべきかを改めて考えさせられました。

私たちが心血をそそいでいるテレビジョンでも、書籍でも、永く生き続けてこそ、真の価値が認められるということです。それは、当事者たちだけのひとりよがりではなく、広く深い人々の支持がなければ、あり得ない真実だからです。

日本テレビ

大久保 豊



その真実に裏づけられたピティナから成長された方々と共に、テレビ番組を制作したり、音楽イベントを開催したり、音楽に関する本を出版するのが、私の夢にほかなりません。

そこでは、きっと、人間への愛情に満ちあふれた才能が、花開くはずだからです。(日本テレビ放送網株式会社事業局次長兼出版部長)

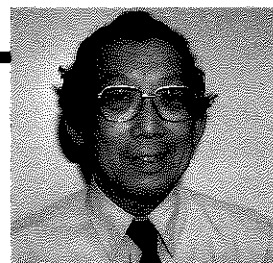
## 「エリーゼのために」から「ドラクエ」に

### —変り行く環境への挑戦—

私とPTNAとの付き合いが始まったのは1981年からであるが、もちろん福田靖子先生との出会いがご縁の始まりとあってよい。当時私が勤めていたエッソが後援していたジュニア・フィルハーモニック・オーケストラの小林専務のご紹介によるものだ。この時先生は淡々として、如何にしてPTNAが発足するようになったかのいきさつを述べられたのが、強く印象づけられた。「おみくじを引いたら凶と出たので、恐れおのきながらもがんばるより他なかった。」という先生の逆境にもめげないチャレンジ精神にも心を打たれたし、又子供のコンクールの審査が外国人も含めて公明正大に行なわれ、審査の

エッソ石油

多田 正遠



内容も本人に通知されるなど感心させられる点が多々あった。そのようなわけでエッソが目指していた国際的理解と親善を深めるとか、音楽を通じて青少年の人格形成に寄与しているなどの、社会活動の幾つかの基準に合致することから、エッソ賞という形での後援が始まったのである。この賞の設置により何人かの才能ある子供達が海外で力だめしをして、更に次のハードルに挑戦し自己の能力を開発していくことができたならば幸いである。



左

- 118号 昭和60年 8月
- 125号 昭和61年 8月

右

- 141号 昭和63年12月
- 116号 昭和60年 4月

